

特集

生活の中の化学物質を問う

私たちは日々の生活の中で様々な製品を手に取り、使用しています。そしてこれらの製品には多くの化学物質が使われています。本特集で取り上げている香りに関する化学物質もその一つです。しかし近年、生活用品等が放つ香りによって、頭痛や吐き気といった健康被害を発症するケースが増えています。これらは、香りが原因の体調不良であるため「香害」と呼ばれ、それらの被害は多数報告されています。香害は、製品が放つ微量の物質を吸い込むことで起こる現象で、発症のメカニズムは未解明の部分が多いとされています。

一方で、これらの症状には個人差があるため、影響を受けにくい人にとっては、その被害に対する理解を深めることが難しいという側面があります。香害の要因となる製品として挙げられているものとしては、合成洗剤、柔軟剤、消臭除菌スプレー、衣類の防虫剤、漂白剤、化粧品、香水、シャンプー、リンス、制汗剤、整髪料、芳香剤など、身近にあるものが多いのが特徴です。また一度、香害の被害が発生すると、その後はわずかな量の化学物質であっても症状がすぐに現れ、重度の症状へと至るといわれています。もちろん、これらの製品が全て悪いというわけではありません。しかし香害をはじめとした化学物質は、その取扱い

方によって人の健康や環境に対して、大きな影響を与える恐れがあります。ゆえに本号でも述べている「予防原則」の考え方が必要になります。

予防原則は、科学的な因果関係が十分に証明されていない状態や判別がつかない状態であっても、人々の健康や自然環境に大きな影響を与える可能性を考慮して、規制措置や制度を整えていく考え方を表します。

私たちは日々の生活において様々な化学物質を用いた製品を使用し、その恩恵を受けていることも多くあります。その一方で、こうした化学物質によって、健康を損ね、生活に重大なダメージを負っている人も数多くいます。

本特集を通じて、どのような基準や考えのもとに化学物質を捉え、生活の中でどのように取り扱っていけばいいのか、また、化学物質がもたらす影響の範囲はどのように広がっていくのかといったことについて、今一度、身の回りの製品を見つめて考えていくきっかけになれば幸いです。

(本研究所研究員 片上 敏喜)